



8月17日、参議院議員会館に「文子おばあ」がやってきた。キャンプ・シユワブ前で座り込み、体をはって工事車を止める。

沖縄戦当時、文子さんは15歳。目の不自由な母と弟の手を引いて逃げた。米軍に火炎放射器で焼かれた左半身は、今もひきつれている。遺体が浮かんだ「血の泥水を飲んで生きのびた」文子さんは「もし日本が勝っていたら、ウジのわいた負傷者は殺されただろう。日本兵は、壕に入ってきて沖

島袋 文子さん(88)「本土の力を貸してください」

縄県民を殺し、子どもも殺した。(殺されるならと) 砲弾の飛び交う外に出て行った人もいた」…時に言葉に詰まりながら、壮絶な体験を話した。

文子さんは「基地を置くから戦争が起きる。戦争したいなら、血の泥水を飲んでからにしてほしい。安倍総理になってから良いことは一つもない。美しい日本、命や財産を守るといいうが、皆殺しをするような戦争のできる国をつくらうとしている。自衛隊員の命も安倍の命も同じ。命の予備を持っている人はいない」。

集会後、文子さんは官邸前へ移動し、安倍総理(あいにく休暇中だった)に向かって、車いすから訴えた。「100歳、120歳まで生きて基地を止める」。